

ええやん!

# 自分らしい最期とは

あなたは人生の最期をどう迎えますか……。終末期の患者を我が家で看取ろうとする医師や家族の姿を描いた映画「痛くない死に方」が5日から公開される。在宅医療を手がけている兵庫県尼崎市の医師・長尾和宏さんの著書が原作で、高橋伴明監督は「コロナ禍で死を自分ごととして考える人が増えた今こそ見てほしい作品」と話す。

(山田絵里子)

電話での対応に終始し、在宅の末期がん患者を苦しめたまま死

## 「痛くない死に方」きょう公開

なせた在宅医の河田仁(柄本佑)。ベテラン医師・長野浩平(奥田瑛二)の下で学び、在宅医としてあるべき姿を模索する。2年後、末期がん患者・本多彰(宇崎竜童)を担当することになった河田は、以前と全く違う向き合い方を。医学の進歩で延命治療が可能になった一方、かつてのように自宅で死を迎えることは珍しくなった。「65歳になった頃から死を意識するようになった」と語る高橋



在宅医の河田(柄本、左から2人目)は、末期がんの本多(宇崎、同3人目)が残された日々を家族とともに過ごし、死に支える

「ぼっくりいくのが一番理想の死に方」という高橋監督(右)。長尾さんは「医学部を志す人にも見てほしい」と話す



## 高橋伴明監督 在宅医と患者「リアルに」

監督自身、母親が意識のない状態で体に管をつながれたまま亡くなった姿を見て、延命治療への疑問を抱いたという。

映画では「こういうふうに死にたい」という理想を反映させ、終末期医療について事前に意思表示する「リビングウィル」の考え方も示した。最初に適切な医療を受けられず、苦しみ続けて亡くなった末期患者が出てくるだけに、自らの意思で生を全うしようとする本多の姿はいつそう際立つ。

長野のモデルで映画の医療監督も務めた長尾さんは、患者の呼吸の変化などを細やかに指導し、自身は白衣を着ずに患者や家族とふれあう。長尾さんの往診に同行した高橋監督は「医師と患者の視線の高さが一緒に新鮮だった。長尾さんが死に方にすごくこだわったので、映画的な死に方を排除し、よりリアルに近づけた」と明かす。

「棺桶が 軽くなるように 減量中」「病得て 今ならわかる 妻の愛」。在宅で死を迎えることを選んだ本多は、気持ちを川柳にしたため、河田や家族とともにたまに酒をたしなみ、たばこも吸う。生きる喜びを最期まで感じさせる。

長尾さんは「医師と患者と家族、思いは皆ばらばら。映画を見て、ロールプレイングのように語り合っただけ」と力を込める。

自分にも家族にも、いつかは死が訪れる。コロナ禍で介護や看取りもままならない中、なんとか家族に寄り添おうとしている人も少なくないだろう。どうしたら自分らしい死を迎えられるのか。元氣なうちに考え、話し合っておくことの大切さを教えられた。